
眠り姫のユメ

クラウディア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫のユメ

【Nコード】

N3050H

【作者名】

クラウディア

【あらすじ】

志保は記憶喪失になることによって、心を開き、新一と少しずつ仲良くなっていく。そして新一も・・・本作は新志です。新一志保を溺愛です（笑）

プロローグ（前書き）

誤字脱字があっても、スルーしてください。作者面倒くさがりなため、よほどでないかぎりたぶん直さないでしょう・・・。
駄文でも作者の妄想でもいいと思う方だけどうぞ。

ブローグ

「大変なんじゃ、哀君が！」

そう新一に連絡が着たのは、コナンが新一に戻って二週間後のことだった。

「どうした？灰原になにかあったのか？」

「哀君が、今朝もとの体に戻ろうとあの解毒剤を飲んだんじゃが・
・」

「何だよ？あいつがどうしたんだ？もとの姿に戻ったんだろ？」

「戻った事は戻ったんじゃが・・とにかくこっちに来てくれ、新
ー」

3

俺は博士との電話を切りすぐに阿笠邸に向かった。

博士の家に着くと俺は勝手に家に入った。するとそこには、元の姿に戻った灰原と、博士がいた。

「何だよ、思ったより元気そうじゃねーか」

俺は二人に声をかけて近づいた。

「おお、新一、それが・・・」

「しんいち？・・・」

灰原は博士の言葉を繰り返すようにそう言った。

俺を見つめる灰原に、一瞬どきつとしてしまった。

あまりにも綺麗な顔立ちに透き通る目・・・

目の前にいる少女は、俺の知っている小学生の灰原ではなかった。こいつに綺麗だと言ったら、なんて返ってくるんだろうか？・・・まっ、だいたい想像つくけど。

内心俺は灰原に見とれていた訳だが、もちろんこいつの前で褒めたりなんかするわけもなく

「よっ、灰原、久しぶり。やっぱお前も元に戻ったんだな」

「はい、ばら・・・？」

灰原は博士の方を見た。

「実はな、新一君、哀君は元の姿に戻るショックで記憶喪失になってしまったんじゃない」

「きおくそうしつ・・・嘘だろ・・・」

俺はその言葉に愕然とした。

「一時的なものなのか、ずっと続くのかすら分らないそうじゃ、そもそも幼児化したという事が異例のことじゃし、詳しい原因も・・・」

「何だよ、それ・・・」

せっかく組織も潰れて、こいつにも普通の生活がさせてあげられると思ったのに・・・

プロローグ（後書き）

読者の皆様、作者のただの妄想にお付き合いくださってありがとうございます。がざいます。けして文章もストーリーもうまくないため、それでもいいという方だけ、最後まで読んでくれると嬉しいです。作者はシリアスの場面を書くのがとっても苦手なため、そこらへんは暖かく見守ってくださいね

第1話

「えっと、工藤君は、あの私を病院に連れてってくれた人・・・博士、とはどういう関係なの？」

俺は博士が夕飯の買出しに行っている間に、灰原にいろいろと教えることになった。

「俺の家、ここの隣なんだよ。だから博士には小さいころから色々面倒見てもらってたんだ」

「そうなの、私は博士とは親戚なのよね？私とあなたはこういう関係なの？この家まで走って来てくれたみたいだけど・・・」

おれはそう言われて言葉につまった。何て言えばいい？同じ幼児化された仲間？でも今の灰原にそんなこと言うわけには・・・

「お友達・・・かしら？」

思わぬは灰原の言葉に、一瞬俺は顔が止まってしまった。

「えっ？・・・まあ、そんなところかな・・・」

灰原と俺が仲良く友達ねえ・・・、思わず苦笑いしてしまう

「そう、ごめんなさいね。迷惑かけて・・・」

灰原は記憶喪失というこの事態を以外にも冷静に対処していた。俺は、いつそのまま組織の記憶も何もない方が幸せなんじゃ・・・という考えを心の奥に仕舞い込んだ。

「えっと、だから何か困ったこととかあったら、俺に言えよ」

ここで、前の灰原なら絶対皮肉を言うんだろうな
でも、灰原は・・・

「ありがとう。優しいのね。そうするわ」
そう言っ^て俺に微笑んだ。

こいつもこんな顔するんだ・・・。たぶんこれが本当のこいつなん
だろうな、

俺の前で純粹に微笑む少女。いつか記憶があってもこいつにこんな
顔させたらいいのに・・・。

第2話

下校の時間。俺はいつものように一番に教室をとび出すと、早足で廊下を歩いた。

「ちょっと、新一！」

後ろから蘭が走って追いかけてくる。

「最近どうしたの？いつも急いで帰って」

蘭は俺に追いついてそう言った。

「いや、別に・・・」

俺が急いで帰る理由は一つだけ、そう・・・あいつが気になるからだ。

でも、蘭の前でそれを言う訳にはいかない。

「变よ、新一。何か秘密でもあるの？」

「別にねーよ。ただ最近、無性に家が恋しいってつか・・・」

「何訳の分からない事言ってるのよ？」

「じゃ、俺いそぐから」

俺は蘭を残して走り出した。

「もう！ほんと勝手なんだから！」

後ろからそんな声が聞こえたが、俺は気にせず家に・・・じゃなかったアイツのところへ向かった。

「博士。灰原は？」

俺は博士の家に着くとすぐに灰原の姿を探した。

「哀君ならキッチンだと思うが」

「そっか、サンキュー！」

俺がキッチンに行くと、コーヒーを入れている灰原がいた。

「あら、工藤君また来たの？そんなに心配してくれなくても、私は大丈夫よ？」

「心配なんだよ。お前は『私は大丈夫だから』って強がってばかりさ。少しくらい心配すぎるほうが灰原には丁度いんだよ」

「そう・・・前の私はそうだったの？」

「そっ、お前は周りに迷惑かけないように全部重荷を自分一人で背負っちゃったから、昔から・・・だから俺がちゃん見えて、お前が重荷で潰れないように支えてあげないといけないんだよ・・・とっ、友達として／＼／＼」

言っただけ、少し恥ずかしくなって俺は灰原から視線を逸らした。

「いい友達を持って、私は幸せものね・・・」

そう言うては灰原は幸せそうに笑っていた。

- 友達 - その言葉が今の俺にはちよつとこそばゆかったけど、こいつとの距離がまた一歩縮まった気がして俺は嬉しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3050h/>

眠り姫のユメ

2010年10月11日16時35分発行